孫大雨の詩「愛」について
——聞一多との關わりから——

鈴　木　義　昭

聞一多は1926年1月23日付けの梁實秋への手紙に、

時相過從的朋友以‘四子’爲最密，次之則鄧以蟄、趙太侔、楊振聲等。

と書く[1]。「四子」とはここでは、「清華の四子」のことである。すなわち、朱湘－子沅、饒孟侃－子離、楊恩世－子惠、孫大雨－子潛の四人を指す。後に「聞一多の四子」という言い方もなされるが、そもそも「四子」とは號に「子」字を持つ四人の人物の意であるとともに、聞一多の年少の友人四人の謂でもある。「清華」、「聞一多」という形容の言葉の違いにより、人物に出入りがあって、前者には朱湘、饒溢侃、楊恩世の三人と孫大雨が擬せられ、同じく後者には劉夢葦が配される[2]。本稿では、「清華の四子」の中の一人、孫大雨について、特にその詩「愛」を中心としながら、彼の1930年代半ばまでの詩作を聞一多との關係から述べてみたい。孫大雨關係の詩文の引用については、主として『孫大雨詩文集』（孫近仁編 河北教育出版社 1996年12月出版）による。

*　　*

まず「清華の四子」の一人、孫大雨（子潛）という名前ほどにはよく知られていない彼の事績を、『孫大雨詩文集』の記述及び「我興詩」の記事[3]を元にして辿っておきたい。孫大雨は1905年1月23日、上海（祖籍は浙江省諸暨縣）に生まれる。原名は銘傳、字は守拙、號が子潛である。幼少の頃から聰明で、父親は彼のために清朝の秀才を招き、早期教育を施す。後に、上海青年會付屬の小、初中、高中に學ぶ。數學と詩歌が好きで、天文學を勉强したかったと言う。1919年、北京での五四運動の後を受けた上海の「六三」愛國運動にも參加するとともに、『學生呼』という雜誌を一人で編集刊行する。20年5月15日には守拙の名前で愛國的傾向を帶びた雜誌『少年中國』第11號十一期に處女作（詩）「海船」を發表する。同年8月6日には、創造社と近い關係にある「時事新報・學燈」に詩「水」を發表する。二年後には、文學研究會系の雜誌、

「小說月報」第十三卷第五期に「滴滴的流泉」の數段を發表する。22年、清華學校高等科（舊制）に入學する。イギリスの詩歌に興味を持ち始め、シェリー、ミルトンに憧れた。まもなく、「清華文學社」に入會し、聞一多、梁實秋が相次いでアメリカ留學に赴いた後を承けて、10月17日、「清華週刊・文藝增刊」を復活させ、「清華週刊」文藝欄の主任となる。２５年夏に卒業したが、楊世恩と國內を歷遊する。この間、徐志摩、聞一多たちにより26年4月1日に創刊された「晨報副刊・詩鐫」にも參加し、その第二期に詩「愛」を發表する。この夏、清華學校の制度によって、ニューハンプシャー州にあるダートマス大學に留學するためアメリカに赴く。28年夏、同校を卒業し、エール大學大學院に進む。兩校ではイギリス文學を專攻する。30年初め、ニューヨークで代表作と目される長編詩「自己的寫照」（計畫では一千行を書く豫定であったが、新月書店刊行本では380行）を書き始める。その夏、歸國し、徐志摩の紹介で武漢大學の外文系の教授となる。31年1月、「新月社」の正式な同人となり、徐志摩、聞一多、陳夢家、饒孟侃、邵洵美たちとともに「詩刊」の編集委員を務める。31年、「九・一八」（滿州事變）の後、北平に戻り、北京師範大學（正式には北平師範大學）、北平大學女子文理學院、北京大學（正式には北平大學北大學院）等で教鞭を執る。この年の11月、私淑していた徐志摩が飛行機事故で世を去る。33年春には、青島大學に赴任し、すぐその秋には浙江大學に轉じ、36年春、上海に歸り、暨南大學に出校する。この年の秋、卞之琳、梁宗岱、馮至、戴望舒等とともに雜誌「新詩」を刊行する。1941年冬、太平洋戰爭が勃發したため、香港經由で重慶に行き、四川大學を經て、中央政治學校の外交系で教授となる。抗日戰爭勝利後の1946年12月、復旦大學に籍を得て外文系の主任を務めるが、57年からの反右派鬪爭の中で六年間の獄中生活を餘儀なくされた。その後、文革中も各種の迫害を受けた。1979年に復活を遂げ、翌年、華東師範大學に移って外語系教授となる。中央政治學校、復旦大學を通じて行って來たイギリス文學、特にシェークスピアの翻譯を行い、現在に至っている。

＊　　＊

聞一多と孫大雨の出會いは、1925年9月、北平西城區西單梯子胡同において始まる。その頃の交友については、拙論「『詩鐫』時期の饒孟侃の詩論」に

譲る[4]こととして、當時書かれた作品を眺めてみることにしたい。「愛」は1926年4月10日付けの「晨報・副刊」（1376號）に發表される[5]。聞一多との關係が最も親密な時期の作品である。

往常的｜天幕｜是頂｜無憂的｜華蓋，｜(a)
　　｜往常的｜大地｜永遠｜任意地｜平張；｜(b)
　　｜往常時｜摩天的｜山嶺｜在我｜身旁｜(b)
峙立，｜長河｜在奔騰，｜大海｜在彭湃；｜(a)
｜往常時｜天上｜描着｜心靈的｜雲彩，｜(a)
　　｜風暴｜同驚雷｜快活得｜像要｜瘋狂；｜(b)
　　｜還有｜青田｜連白水，｜古木｜和平荒；｜(b)
｜一片｜清明，｜一片｜無邊沿｜的晴靄；｜(a)

｜可是｜如今，｜日夜是｜一樣地｜運行，｜(c)
　　｜星辰的｜旋轉｜并未曾｜絲毫｜變換，｜(d)
　　｜早晨｜帶了｜希望來，｜落日的｜餘輝｜(e)
留下｜這沈思，｜一切都｜照舊地｜歡欣：｜(c)
　　｜爲何｜這世界｜又平添｜一層｜燦爛?｜(d)
　　｜因爲｜我掌中｜握着｜生命的｜權威！｜(e)

これを見て明らかなように（()の内a～eは脚韻。以下同じ。「行［xing］」と「欣［xin］」は通韻―筆者）、八行、六行からなるペトラルカンソネットである。各行等しく十二文字で、それらがいずれも五つの部分に分かれている[6]。この一つ一つの部分を孫大雨は後に「音組」と呼ぶ。「音組」とは、

音組乃是音節的有秩序的行進；至于音節，那就是我們所習以爲常但不大自覺的、基本上被意義或文法關係所形成的、時長相同似的語音組合單位。

のことである[7]。これは聞一多が「音尺」と呼ぶものによく似ている[8]。しかし、「音尺」は「二字尺」、「三字尺」と言うように、我々が使う「音節」の意味であって、孫大雨の言う「音組」は「音節」の組合わさったものそのものを言うわけである。彼は聞一多が「詩的格律」で述べたことに對して、

除了各行音節數應當整齊的這一點和我意見一致外，其他各點我當時都不能同意（雖然只凭個人的直覺，沒有理論作根據），所以從未在任何一首自己所寫

的或飜譯的詩里照辨過。

と言って、當時から聞一多「詩的格律」の理論に同意できなかったとする[9]。これも聞一多との關係を象徴する物言いである。

後に孫大雨が「聞一多の『死水』より五日早く世に出た」と言う[10]のも、完全な格律詩は自分から始まるという自負によるものであろう。しかし、ソネット制作の有無で言えば、それは正しくない。聞一多自身は三首のソネットを殘している。『紅燭』所收の「風波」(1921年5月發表)、『死水』所收の「你指着太陽起誓」(1927年12月發表)及び「收回」(1927年7月發表)であり、「風波」は少なくとも「愛」に5年は先行しているわけである。事實、『紅燭』所收の「風波」は1921年5月20日付けの「清華週刊」第220期に發表され、『紅燭』發行に際して大幅な改定が行われている。この間の事情については、拙論「聞一多と“商籟體”」で觸れたことがあるので、詳しくはそちらに讓りたい[11]が、要するに、格律詩「死水」發表の時間と比較するならば正しいと言える。ただ、グループの各人が討論に討論を經て發表したという意味では、先後はあまり問題にならないはずである。孫大雨も、

我最初在我國語言里探索這音節，結果發現了它并且加以試驗，是在1925年的夏天，大概在8月間，在浙江海上普陀山前山圓通庵。就在隨後的冬末春初時，和聞一多先生等交換心得的結果，我曾寫過一首含有整齊的音節數的十四行體，在當時的北平《晨報》副刊上發表。

と記し、孫自身、格律詩への嘗試が1925年の夏であったこと、「愛」が聞一多の「黑屋」で友人たちとともに討論した結果得られたものであることは認めているのである。ただ、少なくとも、明らかな意圖をもって格律詩をソネットに應用したのは孫大雨が最初であったと言うことはできるであろう[12]。しかし、「風波」は孫大雨が見逃していいほど雜なものではない。聞一多としても、格律が嚴格なソネット制作を試みたがゆえに、嚴格な格律を持つ「詩鐫」流の現代詩に到達していったものと思われる。

當時、聞一多は朱湘の反目に心を痛めており、その問の事情を梁實秋に書き送っている[13]が、孫大雨の名前は出てこない。彼の專らの關心は、自分に對して敢然と批判を行って來る朱湘にあったのである。この點に關しては、後稿で詳しく論じたい。むしろ、孫大雨自身は、アメリカ文學よりイギリス文學の

方に興味があるという點からか、徐志摩に特に目を掛けてもらっていたふしもある[14]。

*　　*

以下、孫大雨がソネットを作るようになっていく道程を辿ってみることにする。「愛」の完成までは、

> 自從 1917 年有些富于新思想的高級知識分子開始寫白話文的新詩，我在 20 年代中期總覺得新詩的意境太淡漠空泛，粗疏平淡，聲腔節奏跟白話散文怎麼那樣差不多，可說幷無顯著或微妙的區別。

と述べるように、白話詩に對して、意境の「淡漠空泛、粗疏平淡」を感じていたが、その實作は始めていなかった[15]。1926 年 1 月 16 日に「現代評論」第三卷五十八期に掲載された「夏雲」が處女作と言うことができる。それは、

> 我的｜靈魂｜是盞｜善變的｜神燈，
> 燈焰里｜冒出｜無窮的｜幻景；
> 時針｜指不住｜我身體的｜定形，
> 一停眸｜我闖過｜想像｜之境。
> 重疊的｜銀嶂｜淡淡｜點着｜新青，
> 須臾間，｜倒塌得｜白浪｜田田；
> 有時｜飛不盡的　皓翅的　天獸，
> 撒得｜翎毛｜狼藉，嘶斷羽｜淪漣；
> 慢天的｜玉樹｜巨柯｜老幹｜交横，
> 頃刻｜樹散｜林消，｜平沙｜淡掃；
> 這都｜因我｜希望｜乏濫了｜新生，
> 脈搏中｜歡樂｜在猖狂｜喧笑，
> 才把｜痛臆的｜奇思｜臨空｜吐傾。（以下、省略）

のように、全六聯、各聯十三行からなる（ソネットとしては一行缺けるし、韻も正確ではない）。各行は奇數行が十一字で、偶數行は十字に統一されている。各行は恐らく四つ乃至五つの部分に分かれるであろうが、それぞれの語數はかなり出入りがある。脚韻も奇數行に踏まれている。「愛」に比べれば整理されていないように見受けられる。恐らくは、前年の夏、浙江の海上に滯在した時の作であると思われる。なお、本稿の冒頭で引用したように、聞一多が四子につ

いて書いたのはこの時期のことである。

1925年1月、「清華週刊・文藝增刊」に發表された「舞踏會上」の第一聯は、

哦，｜層層｜推涌的｜生命的｜巨波啊 ！

聽着｜你們｜壯穆｜而幽微的｜律呂，

我的｜兢動的｜靈魂，｜沈醉得

便像｜條横亙｜夏夜的｜星川，

向天郊｜把銀光｜緩緩｜酒散。

と詠まれる。やはり、一聯五行で、脚韻も不定である。表面的には十二字の句が四句、十字の句が五句、九字の句が一句という具合になっており、各句の字數及び一行中の foot 數も四乃至五になろうとする傾向を讀み取っていいであろう。「荷花池畔」も同時期のもので一聯五行、全八聯である。當時、聞一多はまだアメリカ滯在中で、孫大雨は清華學校を卒業する寸前のことである。彼は「清華文學社」の先輩としての聞一多を知っていたかも知れないが、直接的な交渉はない。しかも、この時點では、聞一多自身も「格律詩」への道を進むかどうかは決まっていなかった。

さらに、遡って1924年の「秋空」、1922年の「滴滴的流泉」を眺めてみる。「秋空」（引用左）は二、三、四、三、二字のような圖形的な聯を五つ連ねた作品になっている。また、後者（同右）は1～33までの小詩からできている。その1は以下のとおりである。

秋陰，
幽嘩冥，
月影低徊。
夜鶯鳴，
孤靈 ？

1

滴滴的流泉，
滴破了堅固的盤石，
却滴不損柔和的沙土。

とある。孫大雨は、清華在學中の詩歌の傾向を

····但我便向往于詩歌里情致的深邃與浩蕩，同格律聲腔相濟相成的幽微與奇横。

と語り[16]、陳子善は「滴滴的流泉」の特徴を

《滴滴的流泉》片段，抒發對自然、人生、青春、愛情的思考和感受，雖然明顯受到當時“泰戈爾體”小詩的影響，但大都晶瑩可愛，清新可涌，從此

在新詩壇上嶄露頭角。

と言って、タゴール風の詩風を指摘する[17]。概ね三句からなるが、四句のもの、六、七句のものもあるといったふうで、ともに句數のためのエチュードといった感がある。

*　　*

また一方、下って「愛」以降の詩はどうであろうか。「海上歌」は、1926年8月、アメリカに向かう船上で詠まれ、1928年4月10日付けの「新月月刊」第二期に掲載されたものである。26年8月、聞一多は北京を離れ、浪々の身を上海の潘光旦の家に寄せる。後、吳淞の國立大學教授となっている[18]。題材的には聞一多の詩に似た部分が見られる。「海上歌」の一、二聯を左に擧げ、聞一多の詩集『紅燭』所收「太平洋舟中見一明星」の第一、二聯を右に擧げておく[19]。

我要到海上去，
　　哈哈！
我要看海上的破黎。
　破黎張着一頂嫩青篷；
　太陽出在篷東，
　月亮落在篷西，
默默滴滴的大星兒漸漸消翳。

鮮艷的明星哟！
太陰底嫡裔，
月兒同胞的小妹——
你是天仙吐出的玉唾，
賤在天邊？
還是鮫人泣出的明珠，
披海濤淘起？

というように、ともに留學のためにアメリカに赴く船の中で詠んだものであるが孫大雨の方が冷靜で、聞一多の方がややセンチメンタルである點は否めない。各句の字數は等しくないが、「我要海上去，／哈哈！」という聯頭二行のリフレインを持ち、各聯の形式及び字數も同じである。

1930年8月10日發行「新月月刊」第三卷第十期所收の「一支葦笛」は、故郷を遙かに離れた異郷の地で詠んだものとして、1923年に詠まれた聞一多「孤雁」と共通の題材であると言ってよい。孫大雨「一支葦笛」が全五聯で、聞一多「孤雁」が全十二聯である。孫の第一、第二聯を左に、聞一多の第六聯を右に示しておく[20]。

自從｜我有了｜這一支｜葦笛，
總是｜坐守着｜黃昏｜看天明，

啊！那里是蒼鷹底領土——
那悍的霸王！

又望得 | 西天 |烏烏的 | 發黑； 他的銳利的指爪，
從來 | 我不曾 | 吹弄過 | 一聲， 已撕破了自然底面目，
我生怕 | 人天 | 各界 | 要心驚。 建築起財力底窩巢。
那里只有銅筋鐵骨的機械，
我只須 | 輕輕地 | 吹上 | 一聲， 喝醉了弱者底鮮血，
文鳳、 | 蒼鷹、 | 與負天的 | 鵬鳥， 吐出些罪惡底黑烟，
山中 | 海上 | 不曾見的 | 奇禽， 塗汚我太空，閉熄了日月，
經不起 | 這一聲 | 青葦 | 號召， 教你飛來不知方向，
都會 | 飛舞着 | 紛紛地 | 來朝。 息去又沒地藏身啊 ！

と。この詩には、明らかに一行を四つの foot に分けようとする意識があるが、聞一多「孤雁」にそれがないことは言うまでもない。この時期、孫大雨の詩作は長編詩とソネットに向かっていたと考えていいであろう。前者は 1931 年 4 月「詩刊」第二期、31 年 10 月「詩刊」第三期及び 35 年 11 月 8 日天津「大公報」に發表された「自己的寫照」となり、後者は 1931 年、新月社「詩刊」に掲載されたソネット三部作「訣別」、「回答」及び「老話」となる。なお後に、「民族文學」第一卷第二期（1943 年）に發表される遠く離れた家族への思いを詠んだ「遙寄」連作四首はこのラインナップ上にあるが、ここでは觸れない。

* *

最後に、孫大雨のソネット三部作について眺めてみることにしよう。「詩刊」掲載順に、

（1）訣 絶 （2）回 答

天地 竟然 老朽得 這樣 不堪 ！ (a) 你問 我對她 有多少愛，我不知 (a)
我怕 世界 就要 吐出 他最後 (b) 怎樣 回答。愛情 是活命 的米糧，(b)
一口 氣息。無怪 老天 要破舊，(b) 不幸 這人間 缺少了 一種 衡量：(b)
唉，白雲 收盡了 向來的 燦爛 (a) 它也是 生命的 經緯，可是 誰是 (a)
太陽 暗得 像死尸 的白眼 一般，(a) 造物自己，能把它 析了縷，分成絲，(a)
肥圓的 山峰 變幻得 像一列 焦瘤，(b)再用 天上的 尺寸 量它底 短長 ？ (b)
沒有了 林木 和林中 啼緣的 猿猴，(b) 不過 少年人 有個 共同的 信仰；(b)
也不再 有山泉 對着 好鳥 清談。(a) 都信 假使 沒有它，大家 不如死。(a)

大風 抱着 幾根 石膏 在摩娑 (c)　　我對她的愛，可以 比作 一片海：(c)
海潮 披散了 滿頭 滿背的 白髮，(c)　零碎的 慰懃 好比 銀白的 浮沤，(d)
悄悄 退到 沙灘下 獨自 嘆息 (d)　　再 沒有人 能把 它們 計數得清；(e)
去了：就此 結束了 她千古 的喧嘩，(c)　這海沒大小，輕重，也沒有邊界，(c)
就此 也開始 天地 和萬有 的永劫。(d) 她不愛我，浪頭 刀削 一般的陡，(d)
爲的 都是她向我 道了一聲 訣絶！(d) 愛我時，太陽 照着 萬頃的 晴明。(e)

（3）老　話

白從 我披了 一襲 青雲，凭靠在 (a)
渺茫間，頭戴 一頂 光華的 軒冕，(b)
四下里 拜伏着 千峰 默默的 層巒，(b)
不知 經過了 多少年，你們 這下界 (a)
才開始 在我底 脚下 盤旋 往來，—— (a)
自從 那時候，我便 在這地角 天邊，(b)
蘸着 日夜 頹波，襟角 當花箋，(b)
起草 造化底 典墳，生命底 記載，(a)

(登記你們 萬衆人 童年底 破曉，(c)
少壯底 有爲，直到 成功 而歌舞；(d)
也登記 失望 怎樣 推出了 陰雲，(e)
痛苦 便下 一陣秋霖 來嘲弄：）到今朝 (c)
其餘的 記載 都已經 逐漸 模糊，(d)
只剩 星斗滿天 還記着 戀愛的 光明。(e)

となる。いずれもペトラルカンソネットである。そして、各行を五つの部分に分けているが、孫大雨のソネットにおける一つの到達點であった。彼は後に、

我雖然已經有意識地運用二至三個字成一個單位，積五個單位成一個詩行，但我當時尙未把這樣的單位定名爲“音組”。我作出“音組”（字音小組）那個定名乃是以後的事，我記得是于 1930 年在徐志摩所編新月《詩刊》第 2 期上發表萍譯《黎耶王》一節譯文的說明里。

と言うが、この「音組」こそ彼の格律詩及び後のシェイクスピア翻譯時の原則の一つとなるものであった[21]。

*　　*

「清華の四子」、「聞一多の四子」だからといって、全てが聞一多流にならなくてはいけないというわけではない。現に、兩方に名前を連ねる朱湘は徐志摩・聞一多を批判し、感情的な齟齬を來し、彼らは袂を分かつことになった。孫大雨はアメリカに留學し、その間に、孫大雨の親友、楊恩世は早世し、劉夢葦が入れ替わりに「四子」の一人に加わる。また、劉夢葦もほぼ時を同じくして早世する。孫大雨は、聞一多の生涯の友人であった饒孟侃とは違い、47ページでも觸れたように、聞一多の「格律」の考え方とは必ずしも一致しない部分があった。アメリカ留學が一つの契機となって、聞一多とは「新月社」を通じた不卽不離の比較的緩やかな關係となっていったと言えよう。孫大雨は、當時の詩壇への影響はあまり大きくはなかったが、ソネットの制作及び中國新詩に格律を齎した人物の一人であったとして中國新詩の歷史に名前を留めることは間違いない。

(完)

本稿は平成十年度早稻田大學特定課題研究「聞一多と日本」による研究の一環である。

注

(1) 『聞一多全集』(湖北人民出版社 1994) vol. 12「書信・日記・付錄」p. 230

(2) 聞黎明・侯菊坤編『聞一多年譜長編』(湖北人民出版社 1994) p・302 で編者は、劉夢葦に「？」を付けるが、「清華の四子」に劉夢葦は入らないのであるから、無用の括弧である。

(3) 孫近仁、孫佳始編『孫大雨詩文集』(河北教育出版社 1996) の孫近仁、孫佳始「前言」及び付錄として收められた陳子善「碩果僅存的“新月”詩人孫大雨」による。

(4) 拙論「『詩鐫』時期の饒孟侃の詩論」(早稻田大學日本語研究教育センター「紀要」vol.11、p. 109)

(5) 4月10日には「詩篇」は發行されない(よって、「詩鐫」に當該詩は掲載されていない)。陳子善及び孫近仁等は同じ誤りを犯す。「晨報」1376號が正しい(注7を參照)。

(6) 『孫大雨詩文集』所收「萍譯瑣談」(p. 257) に見える本人の切り方に從う。

(7) 『孫大雨詩文集』所收「碩果僅存的“新月”詩人孫大雨」p. 445。孫大雨「我與詩」(「新民晚報」1989年2月21日) では、「翌年1926年4月10日發表在北京《晨報・詩鐫》上。而聞一多在4月15日的《晨報・詩鐫》發表他的第一首格律詩《死水》是

在五天之後，不是有人在 1979 年說聞一多在“半世紀前”，而我在“四十年前”發表詩中最早的有意識的格律詩＊？」とあって、格律詩人としては聞一多と同時期であるとの訂正を行っているが、初出の月日、投稿先についてはやはり誤認がある。「格律體新詩的起源」も同様に、

聞一多的第一首格律體新詩《死水》，他後來用作他出版詩集的題名，發表在 1926 年 4 月 15 日的北京《晨報·詩鐫》第 2 期上，比我這首商乃詩晚五天問世。卞之琳在他于 1984 年在三聯書店出版的《人與詩：憶侑說新》一書內《與周策縱談新詩格律信》一一六頁上）中說，我在“40 年前‥‥用了這個詞（按系指“音組”），而聞一多則在“半世紀以前”即已說起“英尺”；實際上聞所說的英文詩里的“英尺”（foot feet）是“英步"的誤稱，而卞說聞一多比我早十年是個顚倒先後的誤解。

として、誤認を指摘し、誤解者が卞之琳たちであることを明らかにしている（『孫大雨詩文集』所收 p. 318、9）。

(8) 聞一多「詩的格律」（『聞一多全集』vol. 2「文餐評論·散文雅文」所收 p. 143）に、「這里每行都可以分成四個音尺，每行有函個“三字尺”（三個字構成的音尺之簡梢淑後倣此），…。」とある。

(9) 孫大雨「詩歌的格律」（原載「復旦學報·人文科學」1956 年第二期及び 57 年第一期。今は『孫大雨詩文集』による。p. 145）

(10) 錢光培選編評說『中國十四行詩選』（中國文聯出版社 1988）p. 17 には、

他的一首十四行詩《愛》（發表干 1926 年 4 月 10 日《晨報·副刊》第 1376 號），是見諸中國現代報刊的嚴格按照意體十四行詩的第一首，却長期被人忽略了。

とあり、さらに

此詩療表于 1926 年 4 月 10 日《晨報副刊》，署名“孫子潛"，未提出“十四行詩"的名目，實際上是一首格律謹嚴的意體十四行詩。所採用的是彼特拉克的“ABBA、ABBA、CDE、CDE"的韵式。詩行的高低，以釣式排列，讓人一目了然。

とある（同 p. 18）。また、孫大雨「我與詩」の記載については、注 7 を參照。

(11) 拙論「聞一多と松籟體」（早稻田大學日本語研究教育センター「講座 日本語教育」vol. 34 1996.3）

(12) 孫大雨「詩歌的格律」には、

‥‥就在隨後的冬末春初時，和聞一多先生等交換心得的結果，我曾寫過一首含有整齊的音節的十四行體，在當時的北平《晨報》副刊上發表。

とある（p. 145）。

(13) 『開一多全集』vol. 12「書信・日記・付錄」p. 235 には、

朱湘目下和我們大翻臉，說*志摩張尖嘴，就不象是作詩的人，說聞一多嫉妬他，作了七千言的大文章痛擊我，聲言偏要打倒饒楊等人的上帝。

とある。

(14) 陳子善は「碩果僅存的“新月”詩人孫大雨」の中で、

孫大雨在達德穆英文文學，兼修西歐哲學史和藝術史，廣泛涉獵西方近代文明，經經受歐風美雨的洗禮。他 1928 年夏獲高級榮譽畢業，旋即進入耶魯大學研究員英國文學系進修。1930 年夏回國，由徐志摩介紹，到武漢大學外文系擔任教授。徐志摩是新月派祭酒，當時執新詩壇牛耳，他如此椎崇孫大雨，當然并非偶然。

と述べている。

(15) 孫大雨「我與詩」(『孫大雨詩文集』p. 313)

(16) 孫大雨「我與詩」(『孫大雨詩文集』p. 313)

(17) 『孫大雨詩文集』所收「碩果僅存的“新月”詩人孫大雨」(p. 444) で、

> ･･･他又在最具號召力的《小說月報》第十三卷第五期上發表組詩《滴滴的流泉》片段，抒發對自然、人生、青春、愛情的思考和感受，雖然明顯受到當時“泰兌爾體”小詩的影響，但大都晶瑩可愛，清新可誦，從此在新詩壇嶄露頭角。

と述べる。

(18) 注 2、直掲書による。

(19) 『聞一多全集』Vol. 1、p. 82 による。

(20) 同上、p. 79 による。

(21) 孫大雨「格律體新詩的起源」(『孫大雨詩文集』p. 318)